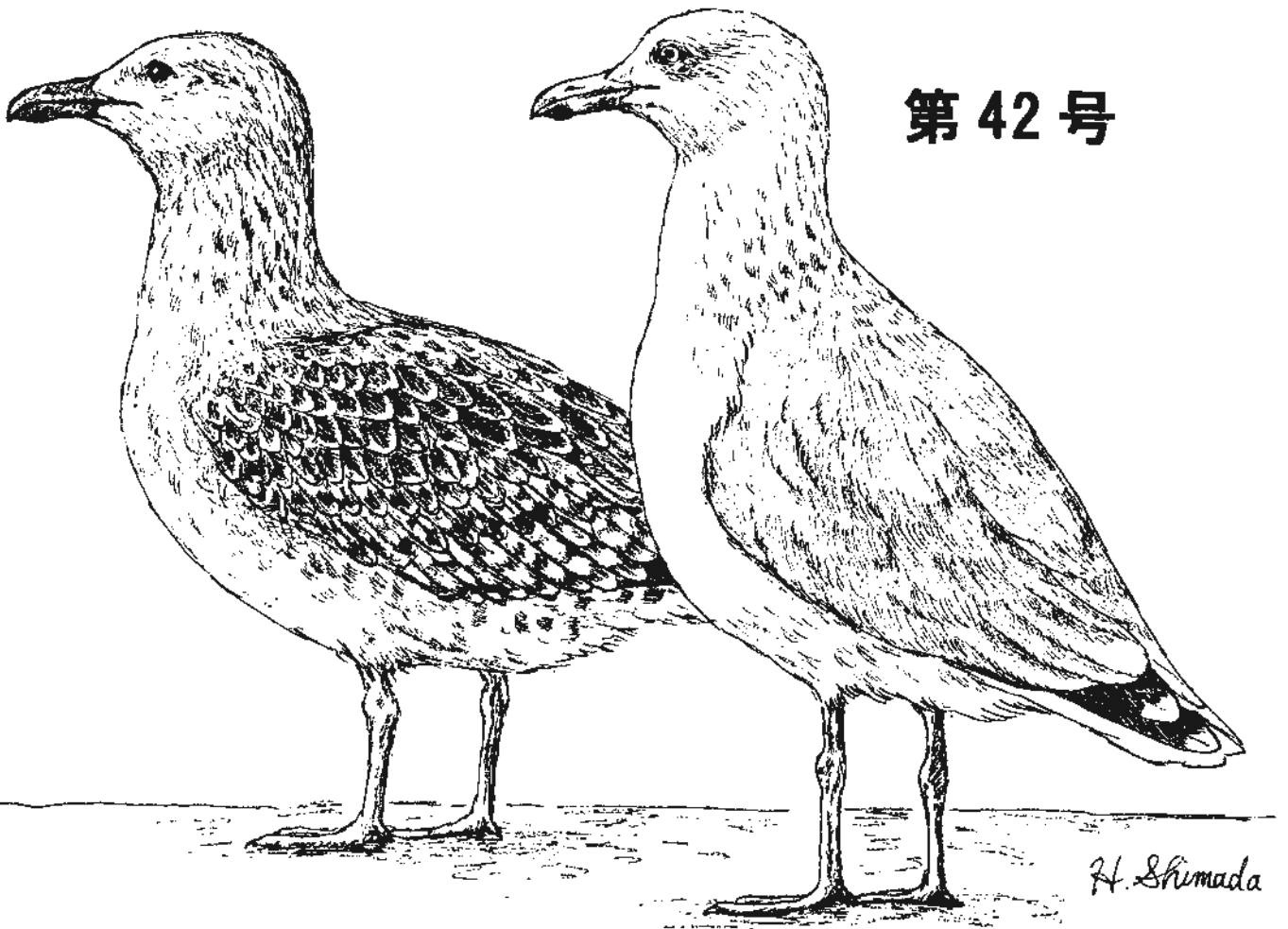


しんせう

第42号



2004年3月
(財)日本野鳥の会
三重県支部



最近、思うこと

今村 禎 (伊勢市)

随分以前から夏鳥が少なくなっているというのは、鳥に興味をもっている皆が感じていることではないだろうか。繁殖地である日本の自然環境の変化も当然考えられることではあるが、それにも増して大きな問題が越冬地の自然破壊であろう。東南アジアの森林が無計画な伐採で急激に減少している。伐採された木材は、建築木材、合板の原材料、紙の原材料またはパルプとして日本へと輸出されている。現地の様子をインターネット等で調べてみると伐採跡地は荒地のまま放置されているか、植林されている場合の多くはユーカリが植林されているとのことである。ユーカリというと私はコアラのえさくらいしか思い浮かぶのだが、OA用紙(上質紙)の原材料に使用されるのだそうだ。したがって緑化のための植林ではなくパルプの原材料を採るための植林である。そして、大きくなれば伐採され日本へと輸出されることであろう。

最近、日本の企業が海外で植林をしているTV-CMがあるが大部分がユーカリであるらしい。

イメージアップを狙ったものであろうか? もう一つの問題は、ユーカリは生長が速いため水分、養分を吸収し尽くし土地を痩せさせ、ある土地では近くの湖が干上がってしまったこともあったとのことである。そして、ユーカリに含まれる成分には殺菌作用があり、微生物はじめ他の生物を排除してしまい、その結果、土壌までが流失してしまいその跡には何も育たなくなってしまうそうだ。

日本はとみれば、OA化が進み紙の消費は少なくなってもよさそうなものであるが、まったく逆である。オフィス街から出るゴミは大部分が紙ゴミである。また、バブルの時代ほどではないが、輸入されコンクリートの型枠になった木材は百年単位の時間を経て育った木が、日本では何ヶ月、へたすれば数週間で産業廃棄物となってしまうのである。

それ以外でも、身の回りをみれば合板でできた家具の類はとにかく多い。そして、どんどん棄てられゴミとなっていくのである。全国の学校で使われている机、椅子はどれだけあるのか見当もつか

目 次

巻頭エッセイ・今月の表紙	-----	2
特集：あこがれの鳥・あこがれの旅		
特集にあたって	-----	3
ケニア・バードサファリ	-----	3
モンゴルで見た鳥類の記録	---	6
森の妖精	-----	7
赤い鳥捜し	-----	8
シマフクロウ	-----	9
アートギャラリー	-----	10
会員のページ	-----	11
連載：今日も鳥日和	-----	13
支部活動のページ	-----	14
連載：鳥々図鑑	-----	21
調査・研究のページ		
2004年ガンカモカウント	-----	22
探鳥会報告	-----	24
編集後記	-----	26



今月の表紙：ペン画 嶋田春幸

今までカモメ類をしっかりと見たことがなかったのだが、今シーズンはセグロカモメの亜種を識別出来るようになればと漁港に足を運んでいる。いくら顔つきや羽根の模様が違う個体を画像で記録してみたものの、なかなか識別するには至らず、やはりカモメは難しい。



ないが、物凄い量の合板が使われているのであろう。現在の技術をもってすれば、間伐材等の日本の原材料を利用した物を作ることくらい容易いことであろう。

コストの問題はあるが、自然を回復させるコストを考えれば安いものである。

そして、本当の問題は輸出する現地の人達がす

んで木を伐採しているのではなく、日本が行う途上国へのODAは無償援助ではなく半分以上が円借款であり、その借金を返すため自然を切り売りしなければ生きていけない現地の実情を我々は考えなくてはならない、もうすでに手遅れなのかもしれないが。

あこがれの鳥、あこがれの旅

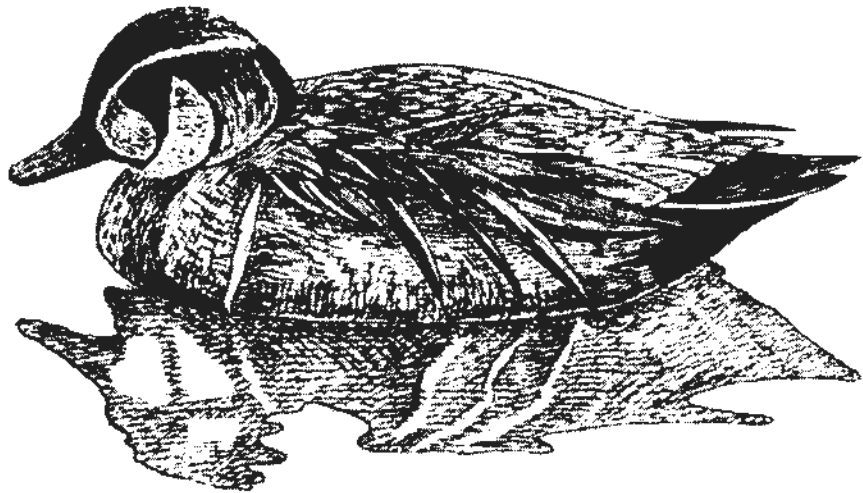
—特集にあたって—

野鳥の会創始者の中西梧堂も同好の仲間と各地に探鳥の旅を重ね、様々な鳥を観察し、書き記しています。その足跡は東京近郊の山河のみならず、浅間山、九州英彦山、御蔵島北海道大黒島など、実に様々です。その記録は「野鳥記」(定本野鳥記：春秋社)に見ることができます。今回は会員の鳥見の旅、あこがれの鳥に出会った感動の記録を集めてみました。

さあもう春がそこまで

来ています。皆さんもあこがれの鳥を探しに出かけてみませんか。

編集部



ケニア・バードサファリ

濱中勝彦 (四日市市)

1. 初めに

一度は人類の誕生の地である大地溝地帯へ行ってみたいと思っていたところ、ケニア・バードサファリの催行が決定したので参加しないか、との新和さんからの誘いで行ってきました。上記のホテルは、皆、綺麗で食事の問題も無く、楽しく過ごせました。また、花が有れば必ず色とりどりのタイヨウチョウがやってきたり、ハタオリドリたちがいたる所で立派な巣を作っていたり、その他の鳥も色とりどりでしかも数も多く距離も近くで見られ感激でした。更に、獣も殆どのものを見る事が出来ましたので、鳥屋はやはりバードサファリで行くべきだと思いました。(スマイレロニシキタイヨウチョウ：次ページ上左図)

大陸はとても広大でしたし、長く続く断崖が印

象的でした。

2. ツアー結果

2-1. ナクル湖

早朝サファリ。ホテル周辺の林には、ヒヨウもいるとのことでガイド兼運転手に発見を依頼するも今日は見つからず残念。でも、サンコウチョウ、ニシブツポーソウ、エボシクマタカなど出現。湖岸に、コガタフラミンゴの大群。紅いのと白っぽいとのいる。白いのは、幼鳥とのこと。その他、ヘラサギ、ペリカン、ダチョウ、他。フラミンゴを見ていると、目の前に、10数羽のシギの群れが着水。あれっ？嘴が曲がっている。アヴォセットだ。こんな所で、ご対面とは。上空に、ゴマバラワシ。(コガタフラミンゴ：次ページ下右図)

原っぱでは、メジロ程の小さな体に30cm位ある長い尻尾をなびかせて飛んでいるテンニンチョウ。ご苦労様。獣は、シロサイ、シマウマ、



図1：スマイレイロニシキタイヨウチョウ

バッファロー、ベルベット・モンキー、他。

2-2. バリンゴ湖

湖岸の林や断崖等で探鳥。断崖でのハヤブサが狙いでしたが、天候不良で振られ。此処での圧巻は、なんとと言っても、カバ。なんと夜中にカバがホテルの庭に、草を食みに来ました。夜中、2時頃、来たら起こしてと頼んでおいたら、来ました。何の障壁も無く30m位の距離でご対面。興奮の極でした。その後、3頭来たそうです。また、近くの船着場への木道の上に、なんと、4~5m位もある大きなクロコダイルが昼寝中。鳥も、ホテルの庭でも十分楽しめます。茶や白のサンコウチョウ、コサイチョウ、人懐こいチャバラテリムク、大小のショウビン類、など。また、クロコダイルを追い払って、栈橋の先端近くで、赤黒や黄黒の色鮮やかなキンランチョウ、などを。夕方には、カンムリヅルもお出まし。

2-3. カカメガ

このホテルは、かつて協会の設備だったそうでアルコールは置いてないが持ち込みは構わないとか。商業的でなく、ゆっくり過ごせればいいなと思うようなところです。庭や周辺の森で探鳥。ハシダカサイチョウ、カンムリエボシドリ、ムラサキエボシドリ、他。モズは、どれもオオモズみたいに大きい。日本では、オオだとかカラだと大騒ぎだけど。ここの売店は、小さく品数も少ないけど、質はとても良く値段も安いのでお勧めです。マサイ・マラへの途中のヴィクトリア湖の湖畔で、セネガルショウビン。

2-4. マサイ・マラ

カカメガからマサイ・マラへの道では、大変でした。先ず、30分位、10から20mm位の大粒の雹に襲われ、車の中で思わず首を縮めてしまいました。その後、大雨。道が泥濘になり、途中、何回も車がスタックしたりエンジントラブルを起したり、散々でした。夕方着く予定が、真夜中になり、それでも途中では車中泊か?とまで思いましたので、着いてほっとしました。車が左右に尻を振ったり横になって滑ったり、深い轍にはまって横転しそうになったり、過酷なサファリ・ラリーの一端を体験できました。

宿舎は此処も立派です。前の河には、カバが数十頭。ワニもいました。向こうの平原には、キリンやハイエナも見えます。

翌日から、車上でサファリです。鳥と獣と一緒に楽しめます。

鳥は、ニシブツポーソウ、サイチョウ、何種類かのワシとハゲワシ、ダチョウ、他。

獣は、ゾウ、キリン、ライオン、ハイエナ、ジャッカル、イボイノシシ、ガゼル、他。既に、セレンゲティからヌーの大群が来ています。

ライオンは、車で近づく限り車上から見下ろす位まで近づけますので、400mmでは頭の一部しか写せませんでした。平気で寝ていますので、写真を撮ってもつまらないです。

半日、車上サファリをパスしてウォークサファリをしてみました。一般には禁止されていますが、マサイと一緒にだと可能です。2人のマサイを従えて平原を散歩しますと、とても良い気持ちで



図2：コガタフラミンゴ



特集：あこがれの鳥・あこがれの旅

した。30から100mと離れていますが、キリン、シマウマ、イボイノシシ、そして最後にカバに出会いました。さすがに、カバに出会った時は、マサイも若干緊張気味で道を変えようとカバを避けました。その他、ゾウの糞やカバ、ハイエナなどの足跡もありました。なんの障害物も無く地続きで動物達と対面するのは格別の感慨がありました。‘是非お勧め’です。

2-5. ナイバシャ湖とナイロビ自然公園 (NP)

此処は、ナイロビ空港に近く、高級静養地で来客の服装が立派なので探鳥会仕様の身なりでは気がひけましたので食事の時は着替えました。綺麗な庭や早朝船上から隣接した湖などで探鳥しました。

オオタカ、ペリカン、エリマキシギ、アオアシシギ、セイタカシギ、ヅアオカモメ、他。

その後、空港へ向かう途中で、ナイロビ自然公園でサファリしました。此処は、徒歩でも観察できますが、その時は普通の動物園の様に檻に入った動物がメインになるようです。

公園から空港への途中で、カーナバルとかいうバーベキュー屋で昼食。ここの売りは、ワニ、シマウマ、バッファロー、イボイノシシ、ガゼル、チキンなどの肉を食べさせるところで、一応全部食べてみましたが結局はチキンが一番でした。

カンムリヅル、ダチョウ、ノガン、アカクロノ

スリ、コウギョクチョウ、他。クロサイ、キリン、他。ライオンは休日のようなでした。

3. あとがき

1) やはり、大陸は雄大でした。

2) 移動途中、焼きトウモロコシを買ったら、奥地で0.5? シリング (1円)、町の近くで10シリング (16円) でした。甘味は、全然無いが、旨みはたっぷり。これぞ、‘主食’の感ありでした。

3) 運転手の話では、紅茶栽培農園などどれも英国人の所有とのこと。独立はしたけれど、経済は占有されていて大変の様子。

4) 長靴での探鳥中、トゲを踏み抜いてしまいました。借用の消毒薬で何とか化膿は防げました。これからは、必携とします。

期間; 2003.08.07-2003.08.17

場所:

- 1) ナクル湖 (Lion Hill Lodge)
- 2) パリンゴ湖 (Lake Baringo Club)
- 3) カカメガ (Rondo Retreat)
- 4) マサイ・マラ (Voyager Safari Lodge)
- 5) ナイバシャ湖 (Lake Naivasha Country Club)

	取扱商品
	フィールドスコープ 双眼鏡(小型・大型) 天体望遠鏡 カメラ(新品・中古) その他光学製品各種
	取扱メーカー
	KOWA・NIKON・FUJINON MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他
中部地区最大の光学製品専門店	
TELESCOPE CENTER EYEBELL	
テレスコープセンターアイベル (株式会社アイベル)	
〒514-0801 津市船場町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119	
定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00~19:00	
ホームページ http://www.eyebell.com メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc	



モンゴルで見た鳥類の記録

(1995年)

近藤 義孝 (多度町)

2000年2月号の「しろちどり」の巻頭エッセイでモンゴルの話を書いた。モンゴルで体験した自然と人間とのかかわりについてであった。今回はモンゴルで見た鳥たちを簡単に紹介する。かなり前なので、「1996年三重県高等学校登山部顧問団モンゴル・フィティン登山隊登頂報告書」に掲載した内容を一部手直しし加筆した。

1995年夏、モンゴル・中国・ロシアの国境にそびえるモンゴルの最高峰フィティン峰の登山調査隊の一員としてモンゴルを訪れた。フィティン峰は、モンゴルの最西端にあり、モンゴルアルタイ山脈の最高峰である。モンゴルでは通常モンゴル語であるが、最西端のバヤンウルギー県ではカザフ族が多く、通用語もカザフ語であった。また、当時はソビエトが崩壊し、モンゴルも民主化されていたが、学校などはソビエトが建てたものが多く、教育の制度もソビエトの影響を受けていた。バヤンウルギー県では、民族的な関係でトルコの大学へ留学していたからトルコ語はできるという青年にもあった。

1995年8月5日にバヤンウルギー県に入って、最初に見た鳥は、ウルギー空港の近くの川原で見たアジサシだった。頭の上半分が黒く、川の中にダイビングして、ワカサギのような小魚を捕っていた。夏は雨季のため増水した川でカワウが、潜水をして魚をとっていた。草原では、サバクヒタキが地面に降りて餌をとっていた。空中を飛ぶ昆虫を捕らえるため、ショウドウツバメが急旋回していた。普通のツバメも見かけたが、ショウドウツバメの方が多く見られた。

また、草原の上にヒバリが観察できたが、日本と同じ種であるかどうか確認できなかった。ハクセキレイは、日本で見かけるのとは少し違ったパターンのもので観察できた。日本でも4亜種が観察できるようであるが、その亜種か、または幼鳥である可能性もある。

スズメも見かけたが、日本のものと比べて色が白っぽかった。亜種や変種とまでいかない変異かもしれない。スズメの群れに混ざって(場所によってはスズメの方が少ない)、スズメの仲間の

イエスズメがいた。ヨーロッパでは普通種のイエスズメは西から東へ向かって分布をひろげているが当時のモンゴルではスズメとイエスズメがちょうど同じくらい観察できた。

カラスの仲間はハシボソガラスとワタリガラスとカササギが観察できた。

モンゴルには猛禽類がたくさんいることが有名であるが、この旅行ではトビ以外にイヌワシを見ただけであった。クロハゲワシやオジロワシもいるようだ。草原を移動中、四輪駆動車の中から3羽のヤツガシラが見えた。日本では観察することは簡単ではないが(私は見たことがなかった)、モンゴルで観察できたのは幸運であった(モンゴルではそれほどめずらしくないようではあるが)。

ウランホスの町近くを移動中、湖でたくさんの水鳥がいるのが見えた。旅行の目的が、登山のための調査であったため、車を止めて観察することはできなかった。帰りには車を止めて観察させてもらった。ただ、夕方で逆光であり、鳥たちが向こう岸近くへ行ってしまう、はっきりと観察はできなかった。オオハクチョウは確認できたが、ガンの仲間やカモの仲間などは、種の同定までできなかった。現地の人によると、しばらくするとこの湖は渡りをするための水鳥でいっぱいになるということであった。そんなときにいけるとすばらしいであろう。

行動中、川や湖の近くではよくカモメが観察できた。こんな内陸にもカモメがいるのだなと感心した。

標高3000m位のベースキャンプに入ると日本の高山で聞いたイワヒバリの鳴き声が聞こえ、その姿も見られた。

帰り道、紋のないモンツキ(ジョウビタキ)を見かけ、何だろうと思ったが、クロジョウビタキであった。

テントを張っていたわれわれの頭を越えて、すぐ向こうに着地したツルがいた。そのときは、夕方でよくわからなかったが、ピンボケの写真は撮れた。日本に帰ってから、いつも木曾岬干拓地探鳥会でお世話になっていた愛知県支部の故 樫山勝己さんに見てもらい、アネハヅルであると教えてもらった。テントサイトからヒマラヤを越え、インドの方へ飛んでいくのだったのだろうか。



森の妖精

石原 宏（津市）

2000年の1月に日本野鳥の会に入会しておおよそ4年がたち、会の先輩や鳥友にもめぐまれやっと、ここの所一人歩きでの鳥見も出来るようになったような気がしている。

ここ三重県は探鳥族にとっては格好のフィールドが点在している。鈴鹿山系に代表される山並は南下して大台山系や伊勢神宮の神苑域に続き、伊勢湾から熊野灘にかけての海岸線は多くの河口域も含めた干潟や海浜、湾等がまだまだ残されている。さらに、田園地帯は伊勢平野を中心に広がり、里山もけっこうあり、大小河川や池沼、森林公園と十分に満足している。

そう言った中で出会った鳥達の種類も数を増やして来た。しかし、会いたいと思いつながりながらもなかなか機会に恵まれずにいる鳥達も多く、その中でも憧れのトップクラスの一つ……サンコウチョウ……。

ところが、去年の5月のとある日、鳥友から会えるかもとの情報で早速ワクワクと出かけた。鬱蒼とした照葉樹林の中、溪谷沿いをしばし行くと耳にとびこんできたあの声、その鳴き声から「三光鳥（サンコウチョウ）」との名が付いたと言う、月・日・星（つき・ひ・ほし）ホイホイホイ。すぐに彼の声だとわかった。薄暗い森の中で二人は立ちすくんだ、そして目を凝らしていると高い木立の間をスーッとかすかな影が流れた。鳥友が捉えたスコープの中にはじめて見るサンコウチョウの姿があった。



写真や映像でしか見たことのない憧れの彼とののはじめての出会いだった。まだ若いオスだろうか、あの尾はあまり長くない、しかし頭から胸にかけての紫がかった光沢のある黒色の羽毛と冠羽も確認、独特のコバルトブルーのアイリング、まさに森の妖精。幸運は重なり近くに巣も有ってオスとメスが交互にあの写真で見るそのものの抱卵する様子まで見せてくれた。

そして、長居は彼等に失礼だと思い早々にその場を退散する事にした。さらに幸運は続き森の中の帰り道であの独特の声、キュロローそうですアカショウビンの声に送られ帰路についた。この様なかけがえのない自然環境が永く引き継がれて残されて行くことを祈らずにはいられない気持ちが更に強くなった一日だった。





赤い鳥探し

川口久美 (津市)

日本に住む鳥の中で、赤い色の鳥は意外に少ないものである。「アカ〇〇」という名前がついていても、そのアカとは「橙色」や「明るい茶色」であることが多い。

私が子供の頃、「野鳥観察がしたい」と親にねだって双眼鏡を買ってもらった。母が買ってくれたそれはあまり上等ではないらしく、鳥を覗いても肉眼で見るのと大して変りは無かったが、双眼鏡の丸い視野を通して見ると、見慣れた鳥も新鮮に見え私はおおいに満足であった。近くの野山へ行っては、ホオジロ・カシラダカ・ビンズイなどを夢中になって見た。しかしそれらの鳥はみな、周りの景色と似た枯れ草色やこげ茶色で、「赤い色の鳥」の姿はどこにも見られなかった。私の「赤い鳥探し」はこのころ始まったのかも知れない。

「ウソ」を初めて見たとき、その頬の鮮やかなピンクに目を見張ったものである。頭上は黒、その他は灰色と白というモノトーンの中で、喉から頬にかけての紅色が映え、その姿は優雅と言う他はない。鮮やかな紅色を身にまといながらも少しも異国的でなく、日本の風景によく似合う「器量よし」の鳥である。



ひとりで山を歩いているとアカゲラに出逢う。この鳥は全体が白黒の不規則な斑模様であるが、よく見ると、後頭部と下尾筒になかなかしゃれた赤色を持っている。さしずめ、赤いハンチングを被り、ツイードのジャケットを着て、肩で風切る「森の伊達男」と言ったところだ。

初めて「ノゴマ」を見たのは北海道旅行でのことだった。霧の中、ハイマツの天辺で、赤い喉を見せながら誇らしげに歌っていた。体全体が渋い褐色のなかで、喉にぽっかりと朱色がある。他の日本の野鳥には無い「意表をつくデザイン」である。しかしながら、霧の白とハイマツの濃緑のなかで、彼の喉の赤は見事に輝いて見えた。



ウソも、アカゲラも、ノゴマもそれぞれに魅力的な赤い色を持つ鳥である。しかし正確には、「体の一部分が赤い鳥」と言うべきであろう。本当の赤い鳥はいないのだろうか。

鈴鹿山麓で「ベニマシコ」に出逢ったのはまだ最近のことである。谷あいの雪の中、枯れ草に斜めにとまって揺れていた。冬羽で、その紅色は控えめながら顔から胸、腹に及んでおり探し求めた「赤い鳥」だと思った。想像していたよりずっと小さく、尾が長く細身である。目がつぶらで優しい顔をしており、他の鳥に見られがちな雄特有の陰しさが無い。目先から頬を染める淡い紅色は、艶やかささえ感じさせる。そして何より可憐であった。いつか、夏羽のベニマシコに逢いたいと思う。北海道の牧場、風に揺れるトウキビの穂の先で歌う、真っ赤なベニマシコに出会ったなら私はきっと、彼への称赞の言葉も忘れ、顔に双眼鏡を押し当てたまま陶然といつまでも立ち尽くすに違いない。



シマフクロウ

平井正志（安芸郡安濃町）

第1夜

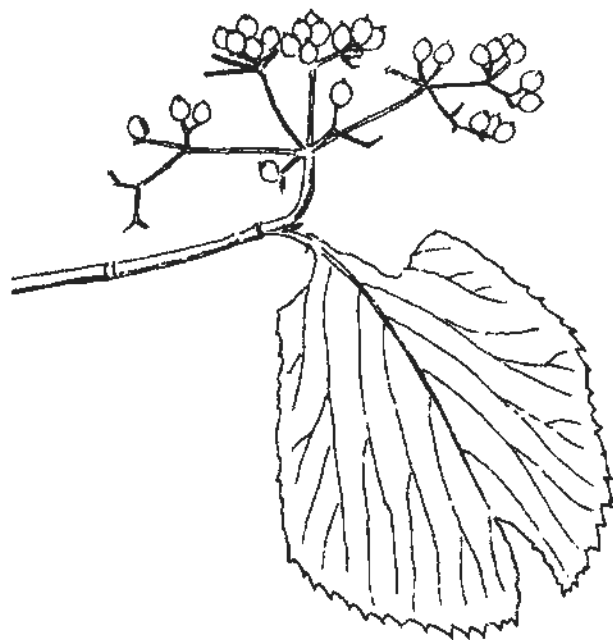
夏の夕方、もう少し暗くなりかけた頃、大阪からの2人づれといっしょにその橋のたもとで待った。今日も道東独特の少し湿気を含んだ曇空である。川は鬱蒼とした木々に覆われていて、橋から流れがすこしだけ見える。水量は豊富で、流れは澄んでいるが、泥炭地らしく、河床は暗い。暗くなり始めるとキビタキが鳴き始める。テッペンカケタカ、エゾセンニュウも近くの木で鳴き始めた。ハリオアマツバメが1羽飛び回る。羽音が聞こえるくらいまで近くを飛ぶ。ブー、ブーと低い声でなきながら、ヤマシギが飛んで流れの上流に消える。ヤマシギはかなりの数がいるようだ。しだいに暗さは増して、木立ちの中は見えなくなってきた。道路の脇で、聞き慣れない、声でさえずる鳥が現れた。ノゴマであった。暗い中でもその喉元の赤さは確認できた。

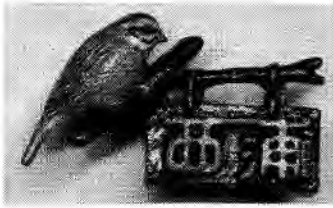
ポポッウーッ、川から少し離れた針葉樹の森の中から何も前触れがなしに聞こえた。森の部分だけ、地下の世界が口を開いて、地下の巨大なチューバの音色が地上に漏れている。聞いていた人はだれも声を立てることができない。それは夜の世界の始まりをすべての生き物に告げている。しばらく間をおいて再び、ポポッウーッ、それはオスとメスの鳴き交わしだという。最初の二声がオスで、それにメスが間をおかず、ウーッと更に低い声で答える。あたかも1羽の声のごとくに聞こえるみごとな合の手である。その声は時間をおいて数回続いたが、それだけであった。その後川の方にシマフクロウは現れず、姿を見ることはできなかった。大阪の2人は最初の声の直前に、肥った鳥が森の飛び込むのを見たという。もう空以外何も見えなくなった頃その場を去った。その声を聞いただけで十分であった。

第2夜

昨日と同じ場所で待った。同じようにキビタキが鳴き、エゾセンニュウが鳴き、ウグイスも鳴き声も聞こえ、ヤマシギも飛んだ。もう何十年もいや何百年も同じ情景が繰り返されているのだろう。ただ、今日はハシボソガラスが2、3羽現れ、

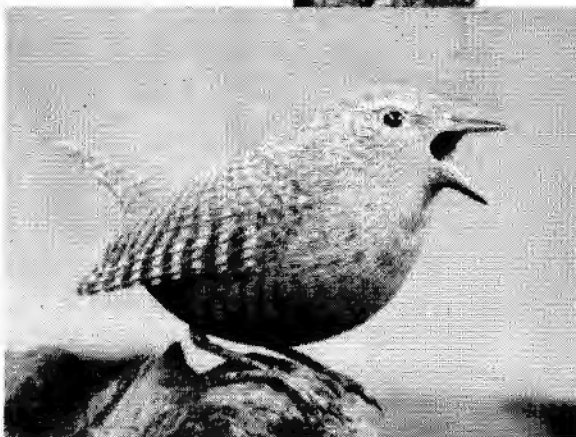
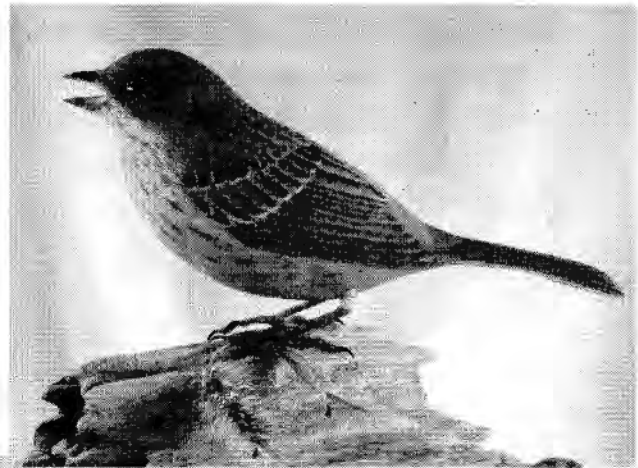
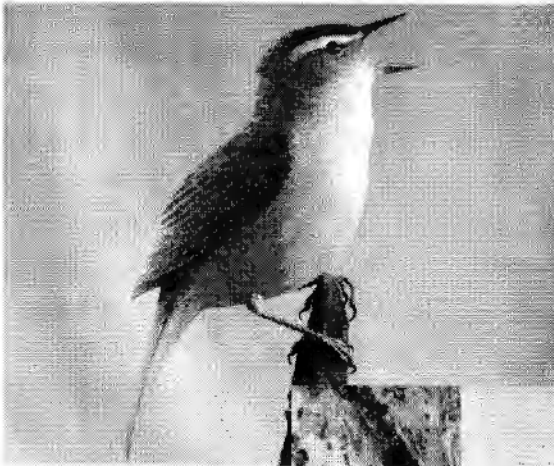
森の上でカアカアと鳴いた。カラスはなかなか飛び去らず、気をやきもきさせた。20分程度はその付近にいたのだろうか、それでもカラスは昼間の鳥、どこかへ去って行き、森はキビタキとエゾセンニュウの声だけとなった。かなり時刻が過ぎてから、昨日と同じ森の中でポポッ、と鳴いた。昨日より声が小さい。なにより、合いの手のウーッという、低い声が入らない。間をおいて数回鳴いた。来たっ、川筋に突き出た枯れ木に大きな茶色っぽい鳥がとまった。もう暗くてはつきりと見えないが、やや腰を前屈みにした姿勢である。こちらを向いたようだ。目が見える。ポッ、低い声で一声だけ鳴いた。その瞬間、喉の白い羽毛がフッと暗い林に浮かび上がり、はっきりと確認できた。尾羽の付近に頭を廻して、しきりに羽繕いをする。暗さは次第に増し、もうシマフクロウと森の境がわからなくなってきた。ウーッ、右手の森の中から別の声がした。もう一羽いるようだ。枯れ木の鳥はのそっと森の方へ向きを変え、大きな翼を音もなく羽ばたいて森に消えた。ウーッポポッ、2羽の鳴き交わしであろう。その声は時々ポポッウーッとなったり、ウーッポポッとなったり、変化して続いた。満足胸に暗い流れを離れた。





バードカービングの小部屋

西浦克征 (津市)



私たちの物を見る目は、意外にいい加減であるように思う。毎日近くで見ることができるスズメを思い浮かべてみても「頬や胸の黒っぽい斑の形や位置」など、なかなか正確に書けないものである。

私の鳥づくりも、大きさや色など感覚的な面が多く、見る人が見ればいい加減だと思われそうだが、今後もその作風は変えられそうにない。本物に近づける努力も少しは必要だとは思っているのだが。



わたしと鳥

西本葉由 (津市)

わたしは、「ウッドノート」というマンガを読んで鳥が好きになりました。鳥のことをいっぱい知りたくなったので図書館で鳥の本やバードウォッチングの本をかりてきて読んでもっときょうみがわいてきました。

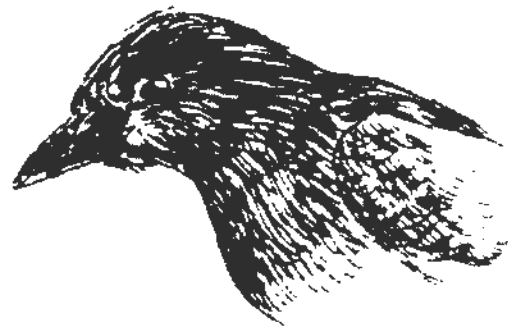
お母さんに図かんを買ってもらって何度も読んで、たくさんの鳥の名前とどこにどんな鳥がのっているのかも覚えてしまいました。カラスにも種類があることを知り、ハシブトガラスとハシボソカラスのちがいがわかり見分けられるようになりました。みているうちにカラスがかわいくて大好きになりました。観察もしやすいので、そこもいいところのひとつです。

わたしの家の近くの谷池の木がほとんどなくなってしまって、カワウが住めなくなってしまいました。その池のカワウはほかの「家」をみつけ

どこかにいってしまいました。今年はまだなかなかなかったキンクロハジロを見つけたときは、よくきたねと思いました。でも、この池に木が少ないので鳥も去年より少ないです。

わたしは、今学校の帰り道にあるおうさん池にいるカルガモ・カワウ・ハシビロガモ・ハクセキレイ・アオサギ・ダイサギ・コサギ・バンを見るのが日課です。これからも、家の周りの鳥たちを観察していきたいです。

(西本さんは将来有望な10才、最年少の会員さんです：編集部)



勿体無い話

(私がホームページを持つようになった理由)

横山真一 (桑名市)

ずっと先だと思っていた定年は来てみると思いのほかあつ気なかった。再就職に備えて勉強を始め、運動不足解消のためにウォーキングをしていて近くの川でカワセミが飛ぶのを見た。カワセミは深山幽谷に住む幻の鳥だとばかり思っていたのでこんな所に・・と衝撃的な出会いだった。それからは双眼鏡を持って歩くようになり、身近にたくさんの野鳥がいるのがわかって野鳥の世界にのめりこんでいった。それにしても勿体無いのは・・・私は長らく名古屋～仙台～苫小牧を往復するカーフェリーの乗組員として働いていた。機関室勤務なので長い時間海を見ている機会は少なかったが時には操舵室に遊びに行くと当直の航海士が「あれはオオミズナギドリですよ」などと海上を飛ぶ鳥を指差しながら教えてくれた。「それがどうした！」当時の感覚で言えば口には出さなかったが腹の中ではそんなふうに返事を返してい

た。教えてくれるままに図鑑でも見ていけば今頃は海鳥のライフリストがぐーんと充実したものになっていただろう。さらに小笠原・父島にも沖縄にも石垣島にも西表島にも何度も行っている。返す返すも悔やまれるが当時は別のことに熱中してとても充実した毎日を送っていたので鳥どころではなかった。

野鳥の会に入れてもらったのはカワセミと出会ってから半年も経ったころだろうか。どこに行ったらどんな鳥が見られるかの情報が欲しかったので送られてくる「しろちどり」の探鳥会情報をリストに作って研究してみた。しかし気軽に行ける距離範囲の情報はわずかばかりしか無かったので自分ながらあちこち見て回るうちいずれは持ってきたホームページを作って自分が野鳥情報の発信源の一つになろうと思うようになった。構想から一年を経過してやっと実現するに至ったがここまで来るのに四日市市のKさんとの出会いが大きかった。カメラを担いで伊坂ダムの周りを歩いていて声をかけてもらったのが最初の出会い



でそこからバード世界が一気に広がっていった。感謝することしきりである。私のホームページはベテランの方々の鑑賞に耐えるものではないが、北勢地方を中心にこまめに情報を出している。時間を多く取れない方には参考になると思うので

ひとも一度覗いていただきたい。

「大山田団地の野鳥たち」

http://www.geocities.jp/legend_yui/

上野探鳥会に参加して

小林達也 (名張市)

2月8日{日}定例探鳥会が伊賀上野城内で行われ参加しました。

天正9年(1581年)地山を利用して築かれたこの城は昭和10年再建され昭和建築木造最後の城で白鳳城の雅名があります。現在は伊賀忍者屋敷、俳聖松尾芭蕉生誕記念の俳聖殿、上野公園もあり観光スポットです。

天候にも恵まれリーダー先頭に定刻出発、スタートして直ぐ観光案内所そばのクロガネモチの赤い実にはヒヨドリが群れ啄ばんでいます。学校横を通過して石畳の坂をあがると城内です。いろは紅葉や桜、松の下にはツグミ、ビンズイ、キジバトがいます。天守閣を左に見ながら筒井城跡へ植栽されたツツジの近くに茶色っぽいスズメ位の鳥はタヒバリだろうかでも居場所が?ビンズイとの識別が難しい。芽吹きには少し早い桜の枝や松にはエナガ、シジュウカラ、コゲラ、メジロの群れだ。この時期に見られる混群だがエナガは間もなくお別れして営巣を始めるだろう。と・突然枝の鳥も地面の鳥も驚いたように飛び立ったその直後こげ茶色の影が急旋回しアラカシ、シラカシの林に消えた。ハイタカ?ツミより少し大きいように見えた。発掘調査場所の横から下りになるヤブ椿にはメジロ、ヤマガラ姿が見え笹鳴きも聞こえるが姿は見えない。俳聖殿前の広場には多くのカワラヒワがえさ探しをしている。屋根上ではセグロカハクセキレイの声もする。西側の谷にはコゲラ、シジュウカラが多く公園広場ではシメ、モズも見られたがお目当てのアオバトには残念ながら会えなかった。林の中で全員で鳥合せをした。出現鳥25種であった。(追記:アオバトは3日後、俳聖殿西側 杉の中で12羽確認した)

バードウォッチングと俳句

(野鳥の俳句入門)

坂口草人

○ 春 の 鳥

春は冬鳥と夏鳥が入れ替わる時期なので鶯や雉、燕などのほか、新春(新年)の鳥を詠む時は、「初」を冠して、初雀・初鴉とする。一般には、鶇・雁・雀・鷹・鷹・鷗などには「春の」を付ける。確定しない鳥は、春の鳥・春禽・貌鳥・呼小鳥・百千鳥等と言う。なお、残り鴨・鳥交る・孕み鳥・鳥の巢など春の季語がある。

駒鳥の嘶くひびき霧の中

さえずりに疲れ癒され山駆ける

近寄ればよるほどつぶら瑠璃鱗

ディスプレイ芸を極めた鳥の恋

小鳥来て薄墨桜ゆれやまず

売れ残る団地の草原雲雀鳴く

雉一声木洩れ日を背に寺領奥

待ちをれば突如雉鳴く山の駅

春の鴨番となりて帰北かな

頬白の一筆啓上今朝も来る



ふあるこおばちゃんの 今日も鳥日和 その2

池の奥の林はカワウの糞で、
一年中雪景色…。
カワウの繁殖羽は今が旬の
冬季限定。雄も雌も一緒だって
知ってました？
楽しいディスプレイも見られるよ！



寝てるのも多い…

カモたちはたくさん
いるけど、遠い、遠い…

マガモ、カルガモ、コガモ、
ホシハジロ、キンクロハジロ、
ハシビロガモ、オカヨシガモなど…

死体引き上げ・死因究明に
妙に熱心な二人。

探鳥会は楽しいな〜 / 1月18日 日曜日

今日は伊勢市・二つ池の探鳥会。南勢地方としては
珍しく、雪景色の中での探鳥会となりました…。

今日の見どころはカモの基本種とカワウの繁殖羽、かな？
しかし、謎の物体を発見し、カモ・カワウの観察も
どこへやらのヒトも…。

結局それは、タコ糸にからまって溺死したキンクロ
ハジロの水死体でありました。ナムアミダブツ。

担当のYさんが持参のカモとハシボソミズナギドリの
翼、といい、東池で見つけたイソシギ？のミイラといい、
妙に死体！に縁のある探鳥会でした。

水面にもうっすらと氷が
はっておりました。
カモのスケート、見たかったな〜。

糸が絡まっていて、
引き上げるの
タイヘン。

いつも初心者に
親切なHさん

堤防の上は雪が積って
いて真っ白。

やっぱり、冬の探鳥会は長靴ですよ！

小坂里香 (度会郡度会町)



今日も鳥日和

支部活動のページ



2003年度第2回理事会（臨時）

日時：2003年9月20日（日）

場所：三雲町ハートフルみくも 出席：13名

現地見学：五主海岸

県内でも有数の渡り鳥の飛来地である五主海岸に、新種のマリンスポーツ（カイトボード）が登場したため、水鳥への影響を懸念し、早急に対応を協議した。

まとめ：ショップでも指導してもらいながら、将来的には（カイトボードを）なくす方向へ取り組むとしたい。

<今後の活動予定>

- ショップ・協会への意見書を送るなどの取り組み
- 五主海岸での観察者から啓発してもらう
- 個人ボーダーへの働きかけ 三重県・三雲町への働きかけ
- 朝明川、雲出川、櫛田川は湿地として保護されていることを訴える
- 伊勢湾全体でのネットワーク作り
- 野鳥の会本部・近県支部への働きかけ
- 野鳥の関係のホームページ（マスコミ）へ働きかける
- 写真の規制についても野鳥関係の人に働きかける

2003年度第3回理事会

日時：2003年11月30日（日）

場所：津市総合文化センター 出席：13名

1) 協議事項

◆ 事務局

- ①理事会開催について 次回は2004.3.14（日）
- ②理事会を3回開催する必要有り（決算などのため）
- ③旅費規程 部長会議：出張旅費を出す（1000円）
キロ20円 公共交通機関は実費
- ④伊勢志摩国立公園・朝熊山山頂レストランにおける野鳥写真パネル展示
野鳥の会提供の写真であることを明示 繁殖の写真は展示しない
- ⑤ホームページ作成中 5名の準備会で準備中
支部報「しろちどり」は目次程度、探鳥地の紹介は保護部で審議する。
県の環境部へもリンクする（相互リンク）

◆ 編集部

- ①「しろちどり」への掲載広告について
コーワの仲介でアイベル 4回で2万円の広告料 今後の部長会で承認する
- ②「しろちどり」発行 12月1日発行の予定

◆ 保護部

- ①木曾岬干拓地 三重県知事に要望書を提出する
- ②いなべ市開発問題 対応協議する
- ③高松海岸霞4号幹線
11月4日 ルート選択の理由説明 今後の対応に意見調整できず持ち越し
- ④吉崎海岸遊歩道計画
事業計画の説明 楠町に対し配慮すべき点など意見を出す





- ⑤カイト問題
- ⑥安濃町ため池改修問題
- ⑦シロチドリ繁殖 田中川河口から三重大まで巣立ち雛3羽繁殖確認

2) 報告・連絡

◆研究部 近況報告

- ①レッドデータ鳥類部会 夏の調査を終わる 冬の調査をする
6月までにカテゴリーを決める 2006年に出版
- ②冬のガン・カモ調査 県の入札
- ③レッドデータブックに野鳥の会へ60万円の費用
離島などの調査に予算を使う

◆企画部 来年度の計画

来年度の探鳥会の計画 支部・地区の区別はない

◆事務局

- ①愛知県へリ訓練地署名活動
- ②講師依頼 親子木工教室 03.12.21 松阪地区木材協同組合 ウッドピア
- ③2004日本エコミュージアム全国大会(伊勢) 04.9.17~18
- ④その他

(文責:西村)

支部活動の記録 事務局まとめ

●支部活動の記録(2003年11月~2004年1月)

- 11/5 会員宛封書の発送作業(事務局)
- 11/11 密猟問題で伊勢市役所・伊勢警察を訪問した(南勢地区)
- 11/30 2003年度第3回理事会を開催した
- 12/9 支部報「しろちどり」第41号発行・発送作業(編集部・事務局)
- 12/11 吉崎海岸整備の件で、現地見学を兼ねて副支部長ら2名が楠町役場を訪問し、関係者と協議した
- 12/17 いなべ市へ開発問題のことで、保護部長ら3名が訪問し、関係者と協議した(保護部)
- 12/21 松阪森林組合の木工教室(巣箱づくり)へ講師を派遣した
- 12/ 木曾岬干拓地問題で、今後の対応を話し合った(北勢地区・保護部)

2004年

- 1/8 河芸町役場へシロチドリの繁殖地へ植樹する問題で、津地区理事ら2名で出向いた(津地区)
- 1/11 南勢地区の地区会を開いた
- 1/10~20 県委託・ガンカモ類一斉調査(研究部)
- 2/7 保護部会開催
- 2/8 編集部会開催

●これからの活動(2004年2月~5月)

- 2/14~15 本部企画の「パードウオッチング案内人研修会」へ2名参加予定
- 2/21~22 「第11回野鳥密猟問題シンポジウムin佐賀」へ保護部長出席予定
- 3/ 鳥獣保護区特別保護地区更新に伴う公聴会開催(3箇所)
- 3/14 2003年度第4回理事会開催
- 4/14 干潟を守る日
- 5/23 2004年度総会・交流会を開催



● 野鳥を撮影されるあなたへ

野鳥をビデオやカメラで撮影される皆さん、きちんとマナーを守っていますか。

たびたび、野鳥の撮影者に対する苦情を耳にする事があります。3～4の事例を挙げますと、①干潟において撮影するため、野鳥が警戒している②野鳥に餌付けして撮影している③野鳥の声をテープを流し野鳥をおびき寄せている④巣の近くで撮影している、等です。他には、自分以外の者に撮らせないようにするためか、野鳥が止まる木の枝を折られていることもあるようです。

本会会員とは考えにくいですが、これに近い行為に心当たりありませんか。これらの行為は、野鳥に過度のストレスを与え、きわめて重要な採餌や繁殖活動の妨害となります。まずは、フィールドマナーの「やさしい気持ち」をおさらいし、つねに野鳥の身になって行動してください。

どうか撮影の際は、撮りたい気持ちをぐっとおさえて、マナーを守っていただくようお願いいたします。(文責：西村)

● 野鳥の敵捕まる！

野鳥密猟犯罪に対する取り組みが本格化してきました。これほど多くのかすみ網が、違法で販売されていたとは驚きです。いったい何羽の野鳥が犠牲になったのでしょうか。組織的な野鳥密猟についての全容解明に期待が高まります。(事務局)

<毎日新聞ニュース速報> 2004・2/4

野鳥の密猟業者らが逮捕された鳥獣保護法違反事件で、警視庁生活環境課の調べに対し、逮捕された密猟業者の一人が「ホオジロを1羽1500円でブローカーに売った」と供述していることが分かった。同課はブローカーを中心に小売業者も含めた密売ルートが存在を確認しており、密猟された野鳥を違法を承知で飼っている愛好家の摘発も視野に入れ、全容解明を進める。

同課は4日午前、千葉市中央区都町1、無職、佐々木貞次郎容疑者(67)ら密猟業者2人と、千葉県白子町八斗、漁網店経営、森川実容疑者ら密猟に使うかすみ網の製造・卸・販売業者ら3人を逮捕。さらに同日午後、かすみ網業者の三重県四日市市住吉町、漁網店経営者(82)を新たに逮捕し、逮捕者は6人となった。

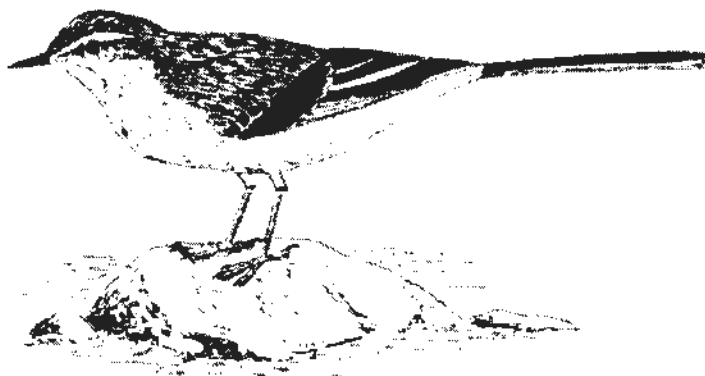
このうち、佐々木容疑者が密猟したホオジロをブローカーに販売したことを認めた。国産のホオジロは、愛好家の間では1羽1万円前後で取引されているという。調べでは、佐々木容疑者ら2人は2001年から昨年にかけて、かすみ網を使ってホオジロ、ヤマガラなど計83羽を捕獲し、それぞれ自宅で飼っていたなどの疑い。森川容疑者ら4人は2002年から昨年にかけてかすみ網延べ約3100張りを販売したなどの疑い。

(情報提供：全国野鳥密猟対策連絡会)

● ご署名ありがとうございます！

昨秋、渥美半島において陸上自衛隊ヘリコプター離発着訓練場を整備する計画について白紙撤回するよう求める署名活動に88名の方がご協力いただきました。これまでに署名数は、611名分集まりました。ありがとうございました！

7月末まで受け付けますので、引き続きご協力いただきますようよろしくお願いいたします。





河芸町豊津浦シロチドリ繁殖地への植樹問題

保護部

安芸郡河芸町から津市にかけての豊津浦は伊勢湾岸で残された数少ない自然海岸です。海岸の幅がある程度確保されており、三重県の県鳥にも指定されているシロチドリが砂の上に産卵し、毎年繁殖しています。日本野鳥の会三重県支部は1996年からシロチドリ繁殖の保護、調査活動を行っています。しかし、年々繁殖数が減り、1990年代には20羽以上のヒナが観察されていましたが、近年は一桁に減っています。主にイヌの散歩やジェットスキー、釣り等、人の侵入が原因と考えられます。このままでは三重県海岸でのシロチドリ繁殖が皆無になる可能性すらあります。

河芸町役場から日本野鳥の会三重県支部に2003年12月に突然電話があり、これまでシロチドリが巣をよく作っていた場所、河芸町上野海岸に防風のためマツを植えるとのことでした。場所は田中川河口から南へ1200mほど南で、海岸の奥行きが狭くなっている場所です。その場所への植樹はシロチドリの繁殖を永遠に不可能にするので良くない、反対であるとすぐさま返事しました。しかし、その時は既に町の予算を取っていた模様で、野鳥の会には事後通告に等しいものでした。この場所は団地のすぐ南で、散歩の人が多いのですが、これまでほぼ毎年シロチドリが巣を作り、卵を抱いていた所です。

2004年1月8日、西村事務局長と西浦理事が河芸町に赴き、植林に反対との要望書を持参しました。しかし、河芸町は町が金を出す、自治会の事業であるとして、まともに返答をせず、シロチドリ繁殖を妨害することについては反論できませんでした。自治会は台風の時に砂が飛ぶのでそれを抑えるために植林すると主張しています。しかし、この団地はもともと海岸のすぐ近くに作られたもので、潮風の害や砂が飛ぶのは入居前から分かっていたことです。それが日常生活を脅かすような災害でもなく、ごくまれに起きるだけであることは歴然としています。また植林したからといって、飛砂を防げるようになるまでには早くとも5、6年はかかるので緊急に植林する必然性はありません。

日本野鳥の会三重県支部はこの植林計画に反対です。植林計画を2、3年延期してシロチドリの繁殖を調査し、計画をねりなおす必要があります。飛砂をふせぐなら、防砂ネットという手もあります。

追記

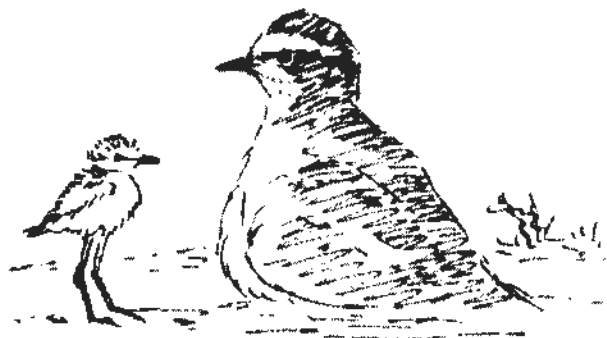
この問題については2月13日に三重県も加わり再度話し合いがもたれましたが、河芸町側は植林計画を撤回せず、話し合いは物別れに終わりました。この件については2月20日付け朝日新聞、22日付け読売新聞などで報道されました。河芸町と団地自治会は2月22日に植樹を強行しました。

(文責：平井正志)

表：豊津浦、町屋浦

(田中川河口から志登茂川河口まで)でのシロチドリのヒナの観察数

年	観察ヒナ数
1996	21
1997	22
1998	14
1999	8
2000	6
2001	3
2002	8
2003	3





木曾岬干拓地の今後の利用について、日本野鳥の会三重県支部は愛知県支部および名古屋鳥類調査会と連盟で、三重県知事に次のような要望書を提出しました。なお愛知県知事へも同様の要望書を提出しました。

2004年2月19日

三重県知事 野呂 昭彦 様

日本野鳥の会三重県支部
支部長 杉浦 邦彦
日本野鳥の会愛知県支部
支部長 佐々木 和治
名古屋鳥類調査会
会長 森井 豊久

木曾岬干拓地利用についての要望書

木曾岬干拓地は木曾川河口左岸の干潟約443haを農地として利用するため、1966年から干拓工事が始まり、1973年には干陸された。しかしその後の農業情勢の変化、県境問題の紛糾により、そのまま放置されてきた。

日本野鳥の会三重県支部と愛知県野鳥保護連絡協議会は1993年から探鳥会を兼ねた鳥類調査を継続し、これまでに隣接する鍋田干拓地での観察を含めて150種以上の鳥類を観察しており、この地域が鳥類の棲息のために貴重な場所であることを確認した。特にこの木曾岬干拓地は人がほとんど入らない中部地方では極めて稀な平地の原野になっている。チュウビが継続して繁殖し、冬季には数多くの猛禽が越冬し、ねぐらを取っていることが確認されている。

この間1993年から日本野鳥の会三重県支部と愛知県野鳥保護連絡協議会は、農林水産省、あるいは三重県に数回にわたり、この干拓地を自然復元のモデルとするよう申し入れを行っている。しかし、当局はこれらの申し入れを真剣に考慮することなく、2001年1月に突如として、運動公園を建設し、その後盛り土をして、流通基地とするという利用案を発表した。

三重県と愛知県の行う環境影響評価調査に平行し、我々は独自に2002年、2003年の2年間、チュウビの繁殖を中心に調査をした。その結果両年とも繁殖行動が見られ、特に2003年には3つがい

の繁殖が確認された（鳥類調査報告書参照）。中部地方でチュウビの継続的な繁殖が確認されているのは河北潟とこの木曾岬干拓地しかない。

この調査と共に我々は干拓地利用案について討論を重ねてきた。貴重なチュウビの繁殖地である木曾岬干拓地について以下の点を要望する。

●干拓地は自然公園とする

干拓地は現状のまま陸地として維持して、猛禽の保護を主目的とした棲息・繁殖のための自然公園とする。

この公園は、大規模な運動公園などのような人が多数入り込む場所とはしない。また流通基地などにもしない。伊勢湾周辺では平地の自然がほとんど壊滅状態であり、この干拓地は平地の自然回復のモデルとして貴重なものになるであろうし、チュウビの繁殖や猛禽のねぐらが間近に観察できる絶好の観察場所となり、また子供達の自然教育の場となることであろう。

●生物多様性の確保

数カ所に現陸地面（海面下1m）より数メートル高い丘を作り、エノキ、タブ等高木を植え、小規模な林を作る。これは鳥類の営巣場所やねぐらとなりうる。

さらに数ヶ所に池や沼をつくり、ヨシなど水生植物を繁茂させ、水鳥の採餌、休息、繁殖の場所とする。

●自然教育フィールドとしての維持管理

ここで目指す自然公園は都市公園などのような、多数の人が自由に入れるものではなく、観察の人数、時期、経路、時間を制限し、十分管理されたものを意味する。野鳥の棲息、繁殖と自然観察が両立できる公園あるいはサンクチュアリをめざす。干拓地の一部に観察歩道、観察施設を設置し、観察指導と管理のためのレンジャーを常駐させる。

以上

木曾岬干拓地利用についての

要望書解説

●干拓地は現状のまま陸地として維持して、最小限の改変を行い、猛禽の棲息繁殖を中心とした自然保護を主目的とし、その一部を県民が利用する



支部活動のページ

自然公園とする。

●生物多様性を確保するための改変

数カ所に現陸地面(海面下1m)より数メートル高い丘を作り、エノキ、タブ等高木を植え、小規模な林を作る。これは鳥類の営巣場所やねぐらとなりうる。この際サクラ(ソメイヨシノ)などの園芸植物は植えず、本来の環境で自生する植物のみを植える。

さらに数ヶ所に開水面(池、沼)をつくり、ヨシなど水生植物を繁茂させ、水鳥の採餌、休息、繁殖の場所とする。この場合護岸などは一部を除いて行わない。この場所は伊勢湾岸で絶滅が危惧される平地の水生植物(オニバス等)を移植し、種の保存の場とすることも検討する。

干拓地の一部に草を刈り、植生コントロール実験地を設ける。これにより、植生を多様化させ、ノネズミなどチュウヒの餌を増やすことを実験する。

これらの改変工事は野鳥の繁殖時期、越冬時期をはずして行い、工事の際に外来動植物を持ち込まないように注意する。

●観察自然教育の場としての自然公園

ここで目指す自然公園は公園といっても国立公

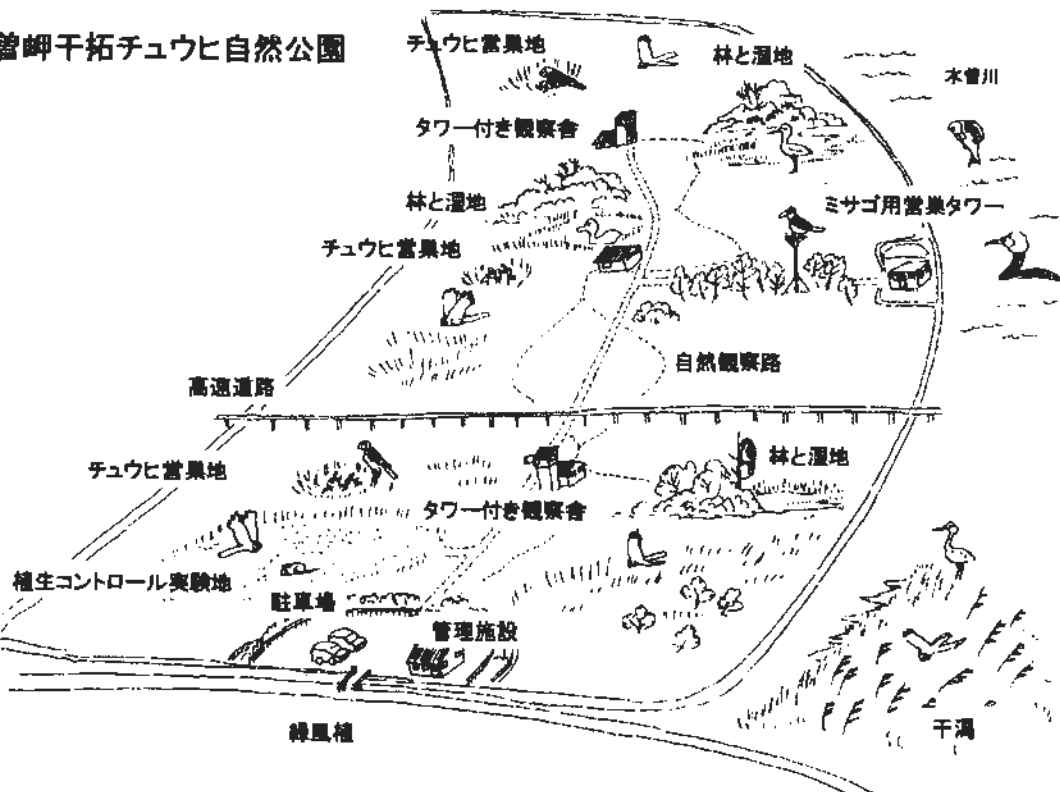
園や都市の公園などのような、多数の人が自由に入り、管理の不十分なものを意味しない。野鳥の棲息、繁殖と自然観察が両立できる管理された公園あるいはサンクチュアリをめざす。そのためにレインジャーの常駐できる管理事務所、兼案内所を入りに設置する。また駐車場も作る。イヌネコなどの外来動物が干拓地に侵入しないように周りにフェンスと水路を造る。また観察者が外来生物を持ち込まないようなバリアーを設ける。

●干拓地の一部に観察歩道(草を刈り、案内板を設置するのみ)を作り、数ヶ所に観察施設兼トイレを設置する。その一部には地上数メートルの位置から観察できるタワーを作る。このタワーはチュウヒの観察に最適な場所となるであろう。干拓地の一部チュウヒの繁殖にとって重要な地域は生物調査目的、干拓地の維持管理目的以外の立ち入り禁止区域として設定する。

●またこの自然公園維持のため、監視、取り締まりなど権限と野生動植物に関する知識を持つフルタイムレインジャーの配置する。このためには野生動植物に知識と経験のある県教員などをあてるとよいであろう。

●自然観察は人数、時期、経路、時間を制限し、レインジャーの管理のもとに行うようにする。

木曾岬干拓チュウヒ自然公園





理事紹介

高橋松人さん 低めの穏やかなお話しぶりが印象的。獣医さんとして傷ついた動物に向けられる優しい目が浮かびます。ヤマドリの研究や、子供たちとの探鳥などで、時々新聞紙上でお目にかかりますが、一月の早朝、ラジオから先生のお声が。ムクドリやハクセクレイの大集団ねぐら、キジ、ヤマドリの樹上でのねぐら、鴨の朝帰りなど、分かり易く興味深く話されていました。

平井正志さん 保護部活動、登山、バンディングなどアウトドアのみならず、絵も本格的。野鳥のペン画の他に癒されるような水彩画も。『一枚欲しいなあ』ファンは多い。さぞ世話のかからないご主人だろうと、女性陣は羨ましがることしきり。奥様曰く『ほんとにそうなの、でも肝心の時も居ないわ』大方、大学教授と思えない長靴姿。そしてお酒が進むほどにジョークを連発、探鳥会旅行ではみんなを笑わせてくださる。

西浦克征さん 趣味はカービング。時々、要請を受け作品展もされ好評である。私達も手ほどきをお願いし、好きな鳥に挑戦！各自の帽子に止まらせています。安濃ダム探鳥会では野鳥の卵のカービング、70ほどを見せてくださり、チドリからイヌワシまで手に取り、色や形を楽しみました。植物にも詳しく探鳥の道すがら、すぐ聞ける幸せ、何度同じ事を聞いても笑わない大きな心の持ち主。

谷本勢津雄さん ……トレードマークのロングヘヤーで、新入会員が一番早く覚える先輩ではないでしょうか？ 保護部長として県下の問題箇所へ出向き頑張ってみえます。松阪—金剛川—三雲—五主へ行くとどこからか現れ親切に説明・案内とてもお優しい方です。その大事なフィールドの干潟もカイトボード・狩猟問題山積で今後の活躍を期待しています。

金児一夫さん 三重県支部の財産管理を担当。パソコンを駆使し、三重県支部の支出入に目を光らせます。本職は、自然食品を扱うお店のご主人で、いつも忙しく飛び回っています。お店はやさしい奥様と店員さんが切り盛りし、ときどき人懐っこい看板犬のわんちゃんも顔をのぞかせます。ふだんはあまりお休みが取れない様子ですが、ひまがあれば山登りに熱中。お話するととても気さくで、バイタリティーあふれる青年のような方です。

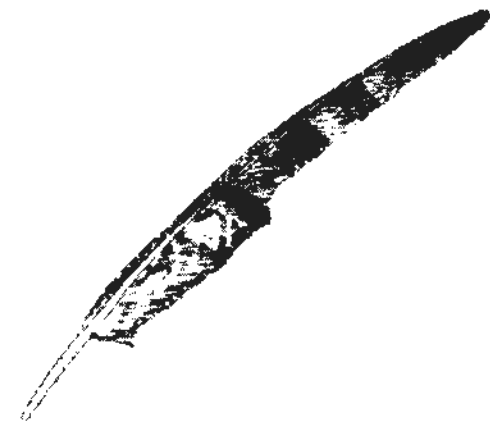
(斉藤加代子・岡 八智子・西村 泉)

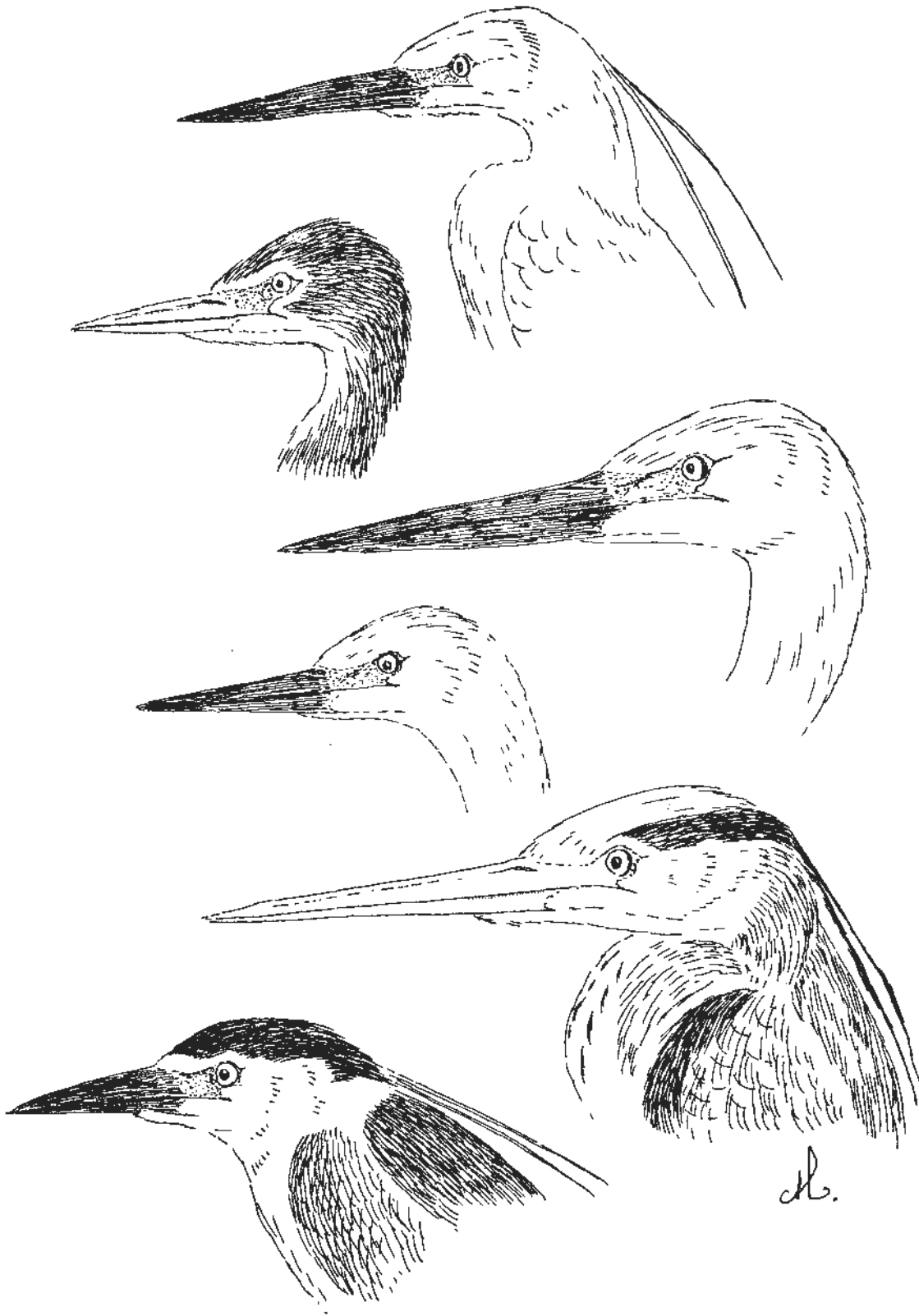
訃報

支部理事・保護部長の谷本勢津雄さんが2月25日心筋梗塞のため亡くなりました。葬儀は27日松阪市斎場で行われ、支部からは杉浦支部長、高橋副支部長、西村事務局長をはじめ多数の支部会員が参列しました。

谷本勢津雄さんは三重県支部の前身である、三重野鳥の会設立当初からの会員であり、三重県支部の指導的会員であり、長年に渡り役員を務められ、特に保護部での活動も熱心に続けておられました。また五主海岸、金剛川、櫛田川河口のみならず、大台ヶ原山系もフィールドとして幅広い活動をされてきました。支部としてはこのうえもなく貴重な人材を失いました。故人の冥福を祈ります。

(保護部：平井正志)





上から コサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、アオサギ、ゴイサギ

ペン画：平井正志
しろちどり 42号



2004年ガンカモカウント

—横綱はホシハジロかスズガモか—

研究部

2004年度も会員のご協力が無事にガンカモ調査が終了しました。県内会員・非会員40名、167カ所の池や河川、河口部、洋上でのカモ。ガンのカウントしていただきました。この調査は三重県からの委託事業で野鳥の会がもっとも組織的な調査が出来るということで、何年も前から調査をしてきました。(その他に県民局の関係職員や、鳥獣保護員なども調査していますが、数の多い地点はほぼ野鳥の会が調査してきました。)

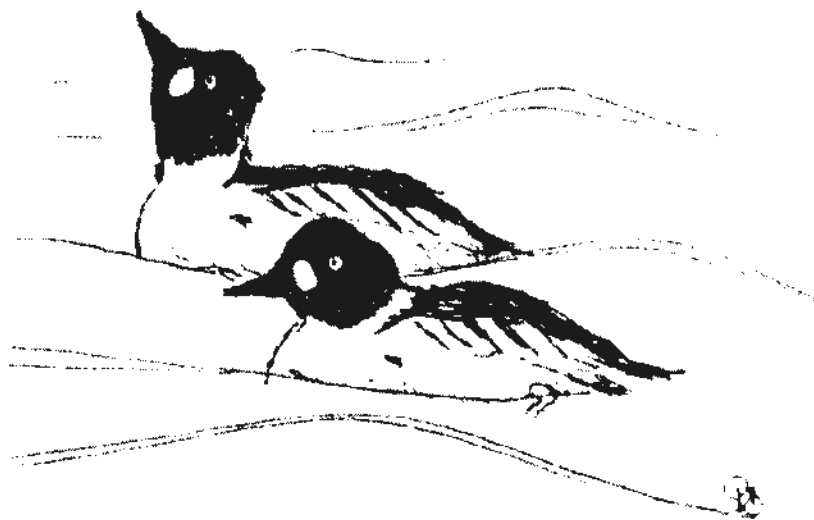
今年度の結果についてダイジェスト版を載せますので、これからの鳥見人生の参考にしていただければと思います。

合計： 57,519羽 (カワウを除く)

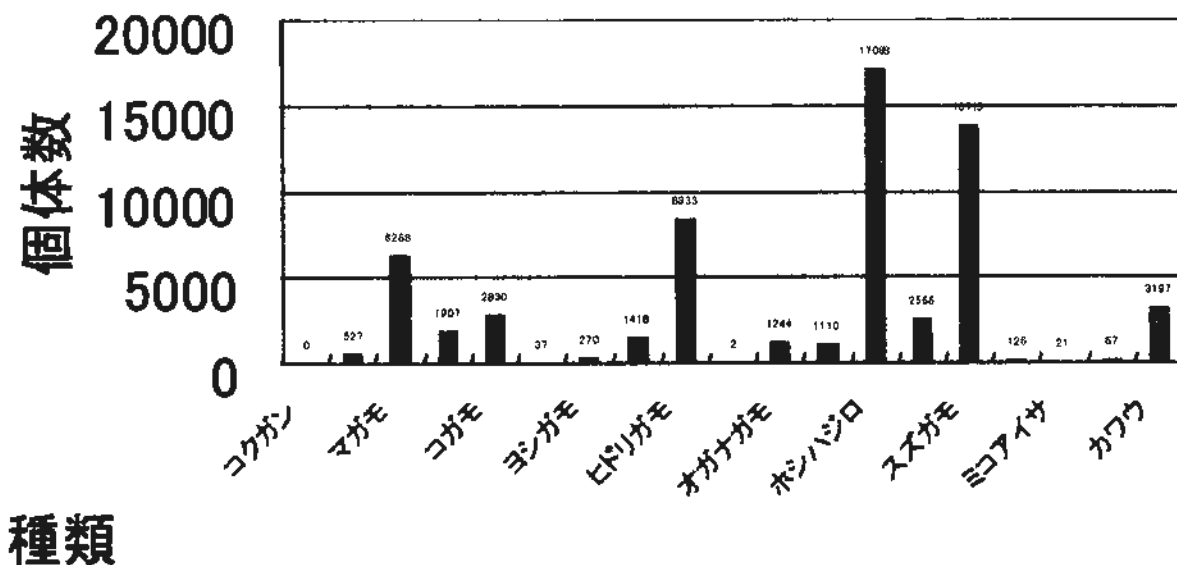
では次に個体数が300羽以上

観察された場所を紹介します。

両ヶ池、鈴鹿川河口、吉崎海岸、鈴鹿川派川、伊坂ダム、石原産業埋め立て地、江島町沖、石垣池、山上池、御座ヶ池、加佐登調整池、田中川河口、雲出古川河口、町屋海岸沖、安濃川河口、岩田池、香良洲沖、五主、高砂養魚池西池、三渡川河口、金剛川河口、宝光池、大淀沖、片田の池 内瀬、風早池、まがたま池、外城田川河口、穴川などでした。



2004ガンカモカウント集計





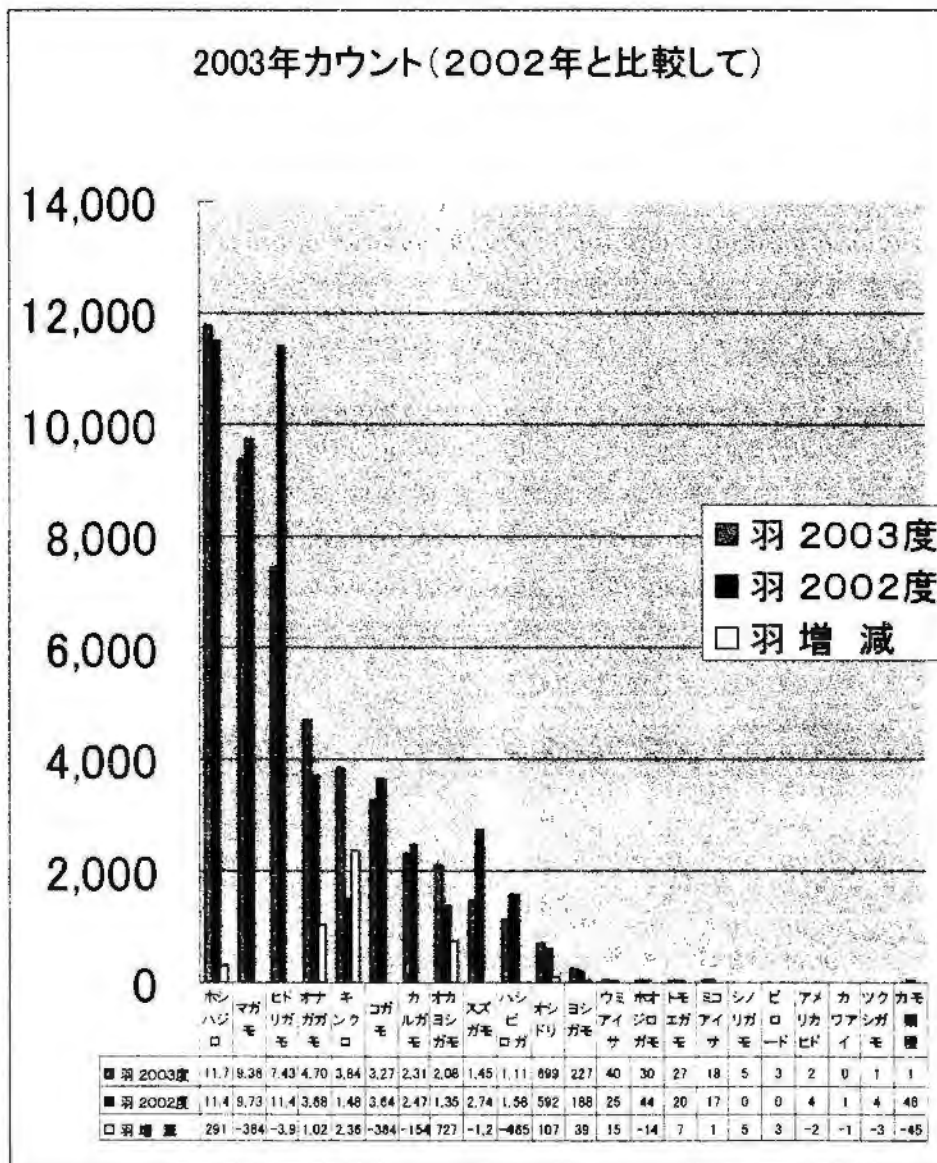
筆者は1月15日に津の安濃川河口、志登茂川中流、町屋海岸沖、志登茂川養魚場を調査して回りました。町屋海岸沖では、スズカモの大群が波間に見え隠れしていました。これをほぼ正確にカウントするのは至難の業。3回カウントして、およその数をとらえることが出来たようです。次に安濃川の河口へ向かいます。昨年は、アメリカヒドリのとてきれいなオスがいたので、今年も来ているかと楽しみにしていましたが、残念ながら、今年は、見られませんでした。そのかわり、ミヤコドリが26羽もきていました。

今回はカワウのカウントにも協力いただきました。私はだいたい3000羽くらいかなと事前に予

想を立てていたのですが、その予想がほぼ的中しました。県がカワウの調査をしています、それに協力した次第です。

ちなみに2003年のデータを最後に載せておきます。(このデータは三重県が作成したものを元に私がグラフにしたものです。会員以外(鳥獣保護員や県職員等)のカウント結果も加算されています) **2003年総個体数 48,436羽**

(文責：前澤昭彦)





探鳥会報告

2003年10月～12月

● 伊勢・タカ渡り探鳥会

2003年10月5日(日) 7:00-10:00

伊勢市宇治浦田町/五十鈴川河川敷駐車場

林 淳子・今村 禎 参加者39人(内会員23名、会員外16名)

カワウ、コサギ、アオサギ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ハイタカ、サシバ(316)、アマツバメ、カワセミ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 21種

皆、期待を込めて空を見上げるものの、サシバ飛ばず。やきもきしているとようやく8時過ぎにポツポツ渡り始める。高く高く渡るサシバ、少数ではあるがタカ柱を作り輪舞等、10時までに76羽が渡る。10時探鳥会終了。その後は交流会に切り替えるが残った人は10名余り、持ち寄りのお菓子等で一服していると頭上に30羽余りのサシバの群が次々とやってきてタカ柱を作る。その群が去ると又又100羽余りの群れ。これも頭上でタカ柱を作り輪舞が始まる。ワーすごいと感嘆のみ。この渡りを皆さんに実感してもらいたったのに残念でした。

● 高見山タカ渡り探鳥会

2003年10月5日(日) 9:30-13:00

高見峠

西村四郎・中村洋子 参加者:25名(内会員16名、会員外9名)

ミサゴ(1)、トビ(1)、ハイタカ(♀1)、サシバ(約400)、キジバト(1)、アオバト(1)、ハリオアマツバメ(約5)、アマツバメ(約10)、ツバメ(約5)、イワツバメ(約10)、ヒヨドリ(約30)、モズ(1)、ウグイス(1)、ヒガラ(2)、ヤマガラ(1)、メジロ(1)、カケス(1)、ハシボソガラス(3)、18種

大峠に着いてすぐに10羽ぐらいのタカ柱がみられた。

13時頃から、約300羽のサシバが渡っていった。この時間帯が観察には良いようです。ツバメは4種類観察できた。

● 里山の鳥を見る

2003年10月19日(日)

赤目エコリゾート

塗矢尋一・田中豊成 参加者9名(内会員5名、

会員外4名)

タシギ(1)、キジバト(2)、アオゲラ(1)、コゲラ(2)、ツバメ(8)、セグロセキレイ(2)、ヒヨドリ(4)、モズ(1)、ヤマガラ(3)、ホオジロ、(5)イカル、(12)、カケス(1)、ハシボソガラス(5) 13種

普段見慣れている鳥たちでした。普通の鳥をじっくりと観察することが出来た。渡去前のツバメが森の上空を舞っていた。

● 木曾崎干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年10月26日(日) 9:00-12:00

三重県木曾岬干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 参加者20名

カイツブリ(8)、カワウ(3000)、ダイサギ(6)、コサギ(10)、アオサギ(2)、マガモ(4)、カルガモ(4)、コガモ(150)、ミサゴ(2)、トビ(1)、ノスリ(1)、チュウヒ(4)、コチョウゲンボウ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(2)、ケリ(1)、タゲリ(14)、クサシギ(4)、イソシギ(4)、タシギ(1)、ユリカモメ(2)、ウミネコ(1)、キジバト(7)、カワセミ(3)、ヒバリ(10)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(20)、ヒヨドリ(5)、モズ(7)、ジョウビタキ(4)、カワラヒワ(10)、スズメ(50)、ムクドリ(20)、ハシボソガラス(30)、ハシボソガラス(3)、ドバト(10) 36種

チョウゲンボウが頭上をゆっくり飛んでくれました。タゲリが14羽、木曾岬干拓地上空を飛んでいました。冬鳥が増えてきました。

● 海蔵川探鳥会

2003年11月18日

(火) 10:00-12:00

四日市市西坂部町

尾畑玲子・高 和義

参加者10名

(内会員5名、会員外5名)

カイツブリ、カワウ、アオサギ、カルガモ、キジ、バン、イカルチドリ、キジバト、カワセミ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ウグイス、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシボソガラス、ドバト 24種





代官橋の工事はいよいよ橋脚づくりにかかっている。橋の下の旧井堰はとりこわされ、川幅が広げられたため見通しがよくなった・・・というより、見るべき緑が失われてしまった。県職員で代官橋工事関係の3人も一緒にバードウォッチング。今後県と意見を密に交わしていけると良いと思う。

● 宮川中流探鳥会

2003年11月20日(木)

雨天のため中止。2004年2月20日(金)にリベンジ。

● 県民の森探鳥会

2003年11月22日(土) 9:45-11:55

三重県民の森

矢田栄史・辻 秀之 参加者36名(内会員14名、会員外22名)

ヒヨドリ、ジョウビタキ、シロハラ、ウグイス、メジロ、カワラヒワ、イカル、ハシボソガラス、ハシブトガラス 9種

近くの御在所岳は、11月22日初雪が降ったとのこと。ノウサギのフンやアマガエル、コカマキリ等が観察できた。

● 木曾崎干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年11月23日(日) 9:00-12:00

三重県木曾崎干拓地/愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 参加者

37名

カイツブリ(8)、カワウ(15)、ダイサギ(4)、コサギ(3)、アオサギ(3)、マガモ(3)、カルガモ(16)、コガモ(85)、オカヨシガモ(8)、ハシビロガモ(2)、ホシハジロ(30)、キンクロハジロ(3)、スズガモ(2)、ミサゴ(5)、トビ(2)、ノスリ(2)、チュウヒ(3)、コチョウゲンボウ(1)、キジ(6)、クイナ(1)、バン(2)、ケリ(3)、タゲリ(4)、クサシギ(3)、イソシギ(3)、ユリカモメ(7)、キジバト(5)、カ

ワセミ(3)、ヒバリ(10)、ハクセキレイ(10)、タヒバリ(30)、ヒヨドリ(10)、モズ(3)、ジョウビタキ(2)、ツグミ(4)、ウグイス(1)、セッカ(1)、メジロ(1)、ホオジロ(5)、アオジ(1)、スズメ(30)、ムクドリ(21)、ハシボソガラス(100)、ハシブトガラス(50)、ドバト(5) 45種

久しぶり45種類も観察できました。「身近な自然を体験する県民デー」の行事でもあり、参加者も37人と多数の方に集まっていただきました。

● 真泥池探鳥会

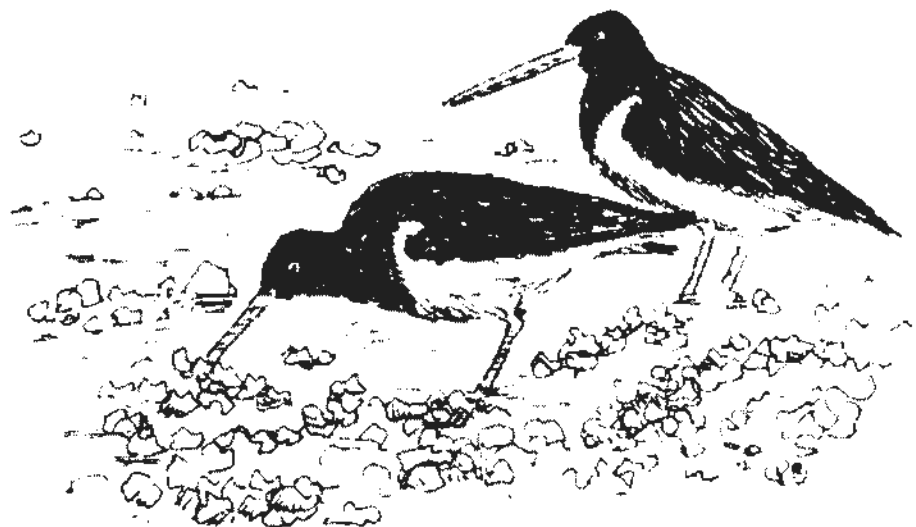
2003年12月7日(日) 10:30-14:00

阿山郡大山田村真泥

塗矢尋一・田中豊成 参加者9名(内会員7名、会員外2名)

カイツブリ(1)、カワウ(1)、ダイサギ(1)、マガモ(2)、カルガモ(15)、トビ(1)、ハイタカ(1)、ノスリ(1)、コガラ(4)、ヒバリ(1)、ハクセキレイ(2)、セグロセキレイ(4)、タヒバリ(1)、ヒヨドリ(14)、モズ(1)、ジョウビタキ(1)、ウグイス(3)、ヤマガラ(1)、シジュウカラ(1)、ホオジロ(6)、カシラダカ(2)、アオジ(4)、カワラヒワ(1)、スズメ(20)、ムクドリ(4)、ハシボソガラス(1) 26種

風が強くてゆっくりと観られなかった。人数が10名ぐらいで行動が早くてよかった。今でも池にボートを浮かべてつりをしている者が居た為、池のカモが追い出されていた。





● 穴川探鳥会

2003年12月7日(日) 9:30-11:45

志摩郡磯部町穴川

今村禎・中村みつ子 参加者18名(内会員12名、会員外6名)

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、チュウヒ、イソシギ、カワセミ、ヒバリ、タヒバリ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ウグイス、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 33種

冬型の割には寒くない探鳥会であったが、暖冬でお目当てのツグミは出ず、カモ類もあまり観察できず残念であったが、魚を掴んで飛ぶミサゴ、チュウヒ、ハイタカが観察できラッキーであった。又、最後のところでカワセミも観察でき喜んでもらえよかった。

● 安濃ダム探鳥会

2003年12月23日(水) 10:00-12:00

安濃ダム(錫杖湖)

編集後記

「ウソが来てるよ。」編集会議の雑談でそんな情報を得た。早春の暖かい日に高原の雑木林へ行ってみると、あの懐かしい口笛が聞こえてきた。無心で桜のつぼみを食べている。胸のバラ色がとても美しい。「久しぶりに会えたけどもうすぐお別れだね。皆元気で無事に北へ帰れよー。」心の中で声を掛けずにはいられなかった。

・今月号に野鳥の会の主旨に沿ったもので、読者の方に有益なものであればと考え、広告を入れました。これについて、ご意見等ございましたら編集部までお願いいたします。

・野鳥に関するものなら何でも結構です。会員の皆様からの投稿、カットをお待ちしています。

石原 宏・岡 八智子 参加者63名(内会員32名、会員外31名)

カイツブリ、カワウ、オシドリ、マガモ、カルガモ、キジバト、カワセミ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ジョウビタキ、ウグイス、ヤマガラ、ホオジロ、アオジ、アトリ、カワラヒワ 18種

天気恵まれ大勢の参加者に驚いてか、鳥が隠れてしまいました。以前は100羽も来ていたオシドリも年々少なく今年は10数羽。色々な問題点を検討し、保護対策を提言すべきでしょう。オシドリの大群の復活を願うばかりです。

● 木曾崎干拓地探鳥会

(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)

2003年12月28日(日) 9:00-12:00

三重県木曾岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 参加者28名

カイツブリ(2)、カワウ(10)、アオサギ(2)、マガモ(2)、カルガモ(12)、コガモ(234)、オカヨシガモ(33)、オナガガモ(1)、ホシハジロ(12)、ミサゴ(7)、トビ(1)、オオタカ(1)、ノスリ(3)、ハイロチュウヒ(1)、チュウヒ(2)、コチョウゲンボウ(1)、キジ(4)、オオバン(1)、タゲリ(30)、クサシギ(4)、イソシギ(4)、タシギ(1)、ユリカモメ(2)、セグロカモメ(1)、キジバト(7)、カワセミ(2)、ヒバリ(5)、ハクセキレイ(6)、セグロセキレイ(1)、タヒバリ(13)、ヒヨドリ(4)、モズ(3)、ジョウビタキ(1)、ツグミ(7)、メジロ(2)、ホオジロ(2)、アオジ(1)、カワラヒワ(30)、シメ(2)、スズメ(50)、ムクドリ(57)、コクマルガラス(3)、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(25)、ドバト(50) 45種

チュウヒ、コチョウゲンボウなど猛禽のフルコースでした。コクマルガラスもいました。

しろちどり 42号

2004年3月15日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 嶋田春幸

カット： 田中豊成・平井正志・小坂里香

編集：平井正志 干

発行所：日本野鳥の会三重県支部

杉浦邦彦方

〒516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4

印刷：伊藤印刷株式会社

〒514-0027 津市大門32-13